

特色 GP「教養日本力」高度化推進プログラム 沖縄出張報告書
 調査者：友常勉

訪問先	琉球大学、沖縄大学
期日	2010年2月24日～26日
目的	<p>日本研究・教育に重要な位置を占める沖縄研究の調査として、沖縄大学・琉球大学における沖縄研究の現状を調査した。その目的のもと、琉球大学移民研究センターおよび名誉教授・石川友紀氏にインタビューをおこなった（2010年2月24日）。また、沖縄大学名誉教授・平良研一氏および沖縄大学・沖縄国際大学等非常勤講師・鳥山淳氏に助言を依頼し、インタビューに応じていただいた（平良氏 2010年2月25日、鳥山氏、2010年2月26日）。</p>
調査結果	<p>① 琉球大学移民研究センターは、2003年に創立され、現在は国際沖縄研究所の一部門（移民研究部門）として活動している。センターでは紀要『移民研究』の発行のほか、石川友紀教授らが収集した日本人移民関係書類・書籍を管理し、学内外の研究に資している。収集資料（後記）にうかがえるように、海外沖縄移民研究を中心に、日本移民研究を牽引してきた研究機関である。日本研究・教育において沖縄研究・沖縄学が不可欠の位置を占めている事実を、研究の蓄積・方法論の提起・課題の提示をとおして示しているといえよう。聞き取り資料を含む膨大な資料のデータベース化が完了していない等の課題は抱えているが、学内外・国内外に開かれた研究機関として大きな可能性を有している。その意味で、共同研究などの取り組みを通して、県外の大学や研究機関との活発な研究交流が期待できることを強調しておきたい。</p> <p>② 平良研一教授については、事前調査としておこなった平良研一氏「沖縄留学生」の経験」（「教養日本力」ブックレット『さまざまな日本の姿を知るⅡ』（2010年3月発行）、所収）を補足していただく方向でインタビューをした。外語大時代の学友たちとの交流や、平良教授の研究テーマである社会教育の理念と現状（沖縄におけるそのギャップ）などを聞くことができた。「東京外語大出身」という人的知的な財産を考えると、「沖縄」という視点を共有できたことには大きな意味がある。返還前の「日留」や、「米留」などの視点をふまえて、「国際化」という問題を戦後日本社会の歴史のなかで考えるべきであることが実感された。</p> <p>③ 鳥山淳氏のインタビューについては山本直美報告も参照のこと。ここでは、沖縄県内大学において、沖縄研究の人材不足や地方史研究をとりまく人的財政的に厳しい現状について触れておく。沖縄の大学の研</p>

究動向が中央志向であることや、地方行政における文化部門の予算の削減、地域性の軽視などが要因となり、大学と地方史との有機的な連携にもとづく沖縄研究の蓄積に支障が生じているからである。これは、前近代からの琉球侵略の歴史や沖縄戦の経験を市町村レベルからくみあげること、日本史・地域社会史研究を牽引してきた沖縄研究にとっての危機であることはまちがいない。日本研究を支える足元を見据える必要があることが強く意識された。ただしそのなかでも、いくつかの県内の自治体では歴史講座などが活発に運営され、地域からの研究運動が育っていることも指摘された。

- ④ この調査では、沖縄研究が占める可能性と意味をあらためて実感することができたと同時に、総じて、大学という組織が直面している困難が極端な形で発現している現状を知ることになった。一般的に、大学での教育研究の実践とは、東京や大都市、あるいは基幹的な研究機関から考えるのではなく、そもそもそうした教育研究が地方レベルでの教育研究に支えられていることの自覚抜きにはありえない。そのことへの理解なしに、日本研究・日本教育の展開はないだろう。こうした視点は今後とも本学の教育研究に反映されるべきである。また、本学としても、卒業生などに働きかける人的交流が促進されるべきである。

収集資料：琉球大学移民研究センター『移民研究』創刊号（2005年3月）、同4号（2008年2月）、同5号（2009年3月）、石川友紀氏（琉球大学名誉教授、琉球大学移民研究センター初代センター長）論文：「日本移民研究のための基礎試論」「海外沖縄移民社会の歴史と実態」「那覇市における出移民の歴史と実態」「沖縄県における農村の変容に関する地理学的研究」「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」「日本における出移民研究史概観－1990年代以降－」「沖縄県人海外移民の父 當山久三小伝」「移民研究の現状と課題」「沖縄と移民 沖縄県移民に関する文献紹介」「海洋民・移民としての沖縄県人」「海外移住の歴史的要因」